

‘ Do you have ~ ? ’ 構文の 初出年代をめぐって

竹田津 進

1 はじめに

疑問文や否定文を作る助動詞 do の迂言法は、他のヨーロッパの言語にはない、英語特有の文法現象である¹⁾。それが本格的に発達するのは1500年頃からで、現在の用法は1700年頃までには確立していたという (Ellegård 1953: 162-63; Barber 1993: 191; 荒木・宇賀治 1984: 427-431 など)²⁾。

助動詞 do の迂言法が発達する以前は、疑問文は主語と動詞を倒置し、否定文は否定語の not などを挿入して作られていた。大劇作家シェイクスピア (1564-1616) の一作品 (*Romeo and Juliet*, 1595-96) から、いくつか例をあげてみよう。(1) は疑問文, (2) は否定文の例である。

(1)

a. How **camest thou** hither, tell me, and wherefore?(II.ii.62)

1) 角田 (2009: 248) は「疑問文を作るのに、主語と動詞を倒置するのは世界的には珍しい現象で... しかも、これらの珍しい現象の中で、この倒置の際に助動詞の助けを借りるのは英語だけである」と言っている。

2) 但し、Tieken-Boon van Ostade (1987: 227) によれば、18世紀になっても、助動詞 do を使う迂言法への移行は完了しておらず、作家によって揺れが見られ、継続進行中であった。

b. **Hast thou** no letters to me from the Friar?(V.i.31)

(2)

a. I **know not** how to tell thee who I am .(II.ii.54)

b. Good gentle youth, **tempt not** a desperate man .(V.iii.59)

しかしながら、シェイクスピアの時代には、すでに迂言法の do も広く使われており、同じ作品の中でも、(3) や (4) のように、一般動詞が助動詞 do と共起する疑問文や否定文が観察されるし、特に (3b) では、同じ台詞の中に、do を伴わない単純用法の例との共存も見られる。

(3)

a. **Do you not see** that I am out of breath?(II.v.30)

b. **Said he not so?** Or **did I dream** it so?(V.iii.79)

(4)

a. You say you **do not know** the lady's mind .(IV.i.4)

b. What if this mixture **do not work** at all?(IV.iii.21)

近代英語期を通じて、ほとんど全ての一般動詞は、疑問文や否定文で、助動詞 do を伴うようになったが³⁾、本動詞 have (「持つ」) は、do と共起することなく、特にイギリス英語では、(5a) や (5b) のように、Have you ~ ? と、口語でよく使われる Have you got ~ ? が、文体的な棲み分けをしつつ、現代まで使われ続けてきた。(5c) のような助動詞 do を伴う構文はアメリカ英語で多く使われてきたが、イギリス英語でも一般的に

3) 但し、*know*, *doubt*, *say*, *think* のように、do を伴わない単純用法が、特に否定文で、後期近代英語まで多く残った動詞もある (Görlach 2001: 109; Nevalainen 2006: 109; Tiekens-Boon van Ostade 2009: 108など)。

なっている (Quirk et al. 1985: 131-132; Biber et al. 1999: 215)。この3つの構文の特徴、使い分けについては、拙論 (2011: 11-28) で詳述している。

(5)

a. Have you any idea what you've done?

No, I haven't.

b. Have you got a cigarette, Jim?

No, I haven't.

c. Did you have a good walk?

No, I didn't.

歴史的には、Visser (1969: 1558-59) は、「19世紀も大分経って初めて、疑問文において *do* が *have* と共に使われるようになった (it was not until well into the nineteenth century that... *do* came to be used with *have* in questions)」と言う。また、「イギリス英語よりアメリカ英語で早く使われ始めたかどうかは定かではない (it cannot be ascertained whether the usage appeared earlier in American English than in British English)」とも言っている。

では、*Do you have ~?* や *I do not have ~*、あるいはその類似構文 (*Does he have ~?* *Did you have ~?* *She does not have ~?* *I didn't have ~* など) のような、本動詞 *have* が助動詞 *do* を伴う迂言法が、最初に文献において現れ始めたのはいつ頃のことであろうか。本稿では、電子コーパスを使ってデータを収集し、初出例を探しておおよその出現時期をさぐるという手順で調査を進めた。なお、この調査は二人称の疑問文だけでなく、否定文を含む類似構文も扱うことは上で述べたとおりであるが、簡潔さのために、「‘Do you have ~?’ 構文の初出年代をめぐって」という表題にした。

2 使用コーパスとデータ

本稿で主に使う電子コーパスは、The Modern English Collection⁴⁾である。これは、米国バージニア大学の電子テキストセンターの作成した、約5,000万語の近代英語のコーパスで、16世紀から21世紀初頭にかけての英米の主要な作家や文人、偉人の作品が多数収録されている⁵⁾。このコーパスを使って、本動詞 have が助動詞 do と共起する疑問文と否定文の用例を検索した⁶⁾。

疑問文の主語は代名詞や普通名詞、あるいは他の名詞相当語句が使われるが、代名詞以外の主語の検索は困難をきわめるので、疑問文については、代名詞主語に限らざるをえなかった。否定文については、‘do not have’ や ‘didn’t have’ などを検索した。否定文の多くの用例が、代名詞を主語としているが、普通名詞や固有名詞なども少数ではあるが現れている。但し、初出例については、ほぼすべての例において代名詞が主語として使われている。

コーパス調査の検索上の課題として、たとえば、‘do you have’ で検索すると、‘do you ever have’ というような副詞が介在する形は、検索の網から漏れることになる。Ellegård (1953: 180-186) は、主語と動詞の間にくる副詞と do 迂言法の出現の関係についても考察し、ever, always, sometimes などの副詞をあげている。Söderlind (1951: 218-219) も、John Dryden の散文作品の動詞統語論の研究の中で、副詞があると迂言法が使われやすいという指摘をしているので (The presence of an adverb favours the use of the periphrasis; adverbs are found in about 20 per cent

4) このコーパスのサイトは次のとおりである。http://etext.virginia.edu/modeng/modeng0.browse.html

5) 但し、バージニア大学在籍者以外の使用者が使える文献は一部制限されている。

6) なお、このコーパス以外に、*OED* 第2版のCD-ROM版も補助的に使った。こちらは、古英語から現代英語までの約3,000万語の史的コーパスであるが、適切な用例は検索できなかった。

of all periphrases), 共起しやすい副詞についても, 挿入して検索するようになった。

収集された用例については, 作品によっては, “modernization” されている場合がある。例えば, David Hume の1741年のエッセイ (“Idea of a Perfect Commonwealth”) で *does* を使った否定文が検索されたが, 原典を確認したところ, 意味の変化を伴う改変がされていることがわかった⁷⁾。また, George Washington の書簡集からも, 否定文が複数検索されたが⁸⁾, これは書簡本文ではなく, 著作集の編注者による脚注がコーパス本文中に混在しているためであることが判明した。Jane Austen の *Sanditon* (1817) からも3例検索されたが⁹⁾, 考察の対象からは除外した。というのは, この作品は Austen によって11章まで書かれた未完の作品であるが, ‘Another Lady’ (Anne Telscombe) により12章から30章まで加筆された, いわば共作の完成版がある。コーパスに入っているのは, その共作版であり¹⁰⁾, 検索されたデータはいずれも, 12章以下のもので, Austen の英語ではない。収集データについては原典にあたって確認することが不可欠である。

なお, 小説における会話は, 作者が虚構の世界の中で登場人物のキャラクター構築をする中で, 現実の言語事象を正確に反映しているとは限らな

7) “the senate **does not have** a negative upon the people, but...their negative goes before the votes of the people.” という文が検索されたが, 原典では, 次のとおりである。“the senate **have not** only a negative upon the people, but, what is of much greater consequence, their negative goes before the votes of the people.” (*Essays: Moral, Political, and Literary*, p.515)。

8) “he **did not have** his commission with him when captured” (*The Writings of George Washington*, vol.6, 1776) というような, いずれも過去時制の否定平叙文が3例検索された。

9) **What** private understanding **did he have** with Clara Brereton?(Ch.17); Sidney **did not have** luck with all his arrangement (Ch.18); And **why does it have** Brinshore on it in those little coloured pebbles?(Ch.21)。

10) 書誌情報は, Jane Austen, *Sanditon*. Houghton Mifflin, Boston, 1975となっている。

い場合があるかもしれない。また、Tieken-Boon(1987: 230)が指摘するように、社会における現実の会話を模写したつもりでも、「作家が周りで話されている会話の機微を正確に聞く耳を持ち合わせていない場合もありうる(their authors cannot have had a very accurate ear for the niceties of the language spoken around them)」であろう。特に、特定の作家における検索例がわずかしかない場合には、特異な言語事象の可能性もあり、その扱いについては注意を要する。

3 do 迂言法構文の初出例

本動詞 have が do 迂言法で現れる用例の検索については、疑問文と否定文とに分けて調査した。一般動詞が do 迂言法と共起する用法については、構文のタイプによって発達した時期が異なることを、荒木・宇賀治(1982: 429-431)や Nevalainen(2006: 108)が、Ellegård(1953: 162)の研究をもとに言及しているからである¹¹⁾。また、主語が you の場合、それ以外の人称代名詞の場合、時制が過去の場合というような区別もして検索した。Söderlind(1951)による Dryden の動詞統語論の研究でも、人称、時制の違いによる、迂言法の出現数の調査をしているので、人称、時制の区別をすることは適切な分析法であると思われる。次節では、まず疑問文を扱う。

3.1 疑問文

3.1.1 Do you have ~ ?

このコーパスを使って、‘do you have’を検索すると、20世紀初頭まででは、次の(6)のような例が見つかる。(同じ年代の複数ある用例の選択

11) Nevalainen は次のように説明している。「初期近代英語期に、まず否定疑問文に広まり、続いて肯定疑問文とほとんどの否定文、いくらかの肯定文にも普及した」

については有名な作家，作品をまずあげるようにした。）

(6)

1824 “ **Do you have** any trouble with the latter gentleman, now-a-days? ” asked Mr. Johnson . (Child, Lydia Maria: *Hobomok*)

1839 Talk ran high upon almost all Montacutian themes . “ **Do you have** any butter now? ” “ When are you going to raise your barn? ”
(Kirkland, Caroline Matilda: *A New Home - Who'll Follow?*)

1852 “ Of course, you defend it - you all do - all you Southerners. What **do you have** slaves for, if you don't? ” (Stowe, Harriet Beecher: *Uncle Tom's Cabin*)

1861 “ **Do you have** much of that sort of thing to undergo in business, father? ” asked Abel, when Jacob Van Boozenberg had gone .
(Curtis, George William: *Trumps: A Novel*)

1869 “ Mother, **do you have** ‘ plans ’ , as Mrs. Moffat said? ” asked Meg, bashfully, “ yes, my dear, I have a great many, all mothers do... ” (Alcott, Louisa May: *Little Women*)

1891 “ Well, I don't. If any living man can manage this horse I can - I won't say any living man can do it - but if such has the power, I am he. ” “ Why **do you have** such a horse? ” (Hardy, Thomas: *Tess of the d'Urbervilles*)

1902 “ How **do you have** the courage to do it? ” (Willa Cather: *The Treasure of Far Island*)

1904 “ Monsieur, ” said Colonel Chouteau, slyly , “ **do you have** many such escapes? ” (Churchill, Winston: *The Crossing*)

1913 “ And so - you have to forgive her a lot of things. ” “ What **do you have** to forgive her, my boy? ” (Lawrence, D. H. : *Sons and Lovers*)

1824年のアメリカの Lydia Maria Child の *Hobomok* からの用例がこの構文の初出例のようである。次に、1839年の Kirkland へと続く。この後、19世紀を通じて現れ、20世紀になると頻度が増加してきている。イギリス英語では、このコーパスに限れば、Thomas Hardy の1891年が初出である。

3.1.2 Do/Does PRO have ~ ?

次に、主語が you 以外の人称代名詞 (PRO: I, we, they, he, she, it) の場合を検索すると、初期には、以下のような例が見つかる。

(7)

1815 We are glad the Mama's cold has not been worse ... Sweet amiable Frank! why **does he have** a cold too? Like Capt Mirvan to Mr Duval, "I wish it well over with him." (Jane Austen: *Jane Austen's Letters To Her Sister Cassandra and Others*)

1862 "... is our good Superior so perfect as he seems? or **does he have** his little private comforts sometimes, like the rest of us?" (Stowe, Harriet Beecher: *Agnes of Sorrento*)

1864 "What the deuce **does she have** that nasty creature there for?" said Cheesacre. (Trollope, Anthony: *Can You Forgive Her?*)

1873 "It has a good moral effect." "Who **does it have** a good moral effect on?" (Mark Twain: *The Gilded Age: A Tale of To-Day*)

イギリス英語では、Jane Austen の1815年の書簡集からが初出である。その後、Trollope の1864年の例がある。アメリカ英語では、Stowe の1862年が初出であり、1873年の Mark Twain からもある。統語的に、ここにあげた4例中、3例が wh- 疑問詞とともに現れているのが目を引く。

3.1.3 Did PRO have ~ ?

時制が過去の場合のこの構文の初期の出現例は次のとおりである。これも, Jane Austen の1815年の *Emma* からが初出である。他はいずれもアメリカ英語からで, Sedgwick の1822年がアメリカ英語の初出である。

(8)

1815 “ **Did you ever have** your likeness taken, Harriet? ” said she:

“ Did you ever sit for your picture? ” (Jane Austen: *Emma*)

1822 “ Yours, ” said Mrs. Wilson; “ that you could not deny, for your

name is at full length on it; and when **did you have** it last? ” (Sedgwick, Catharine Maria: *A New-England Tale*)

1839 “ **Did you never have** the misfortune to live in a community,

where a difficulty in the parish seemed to announce the end of the world? ” (Longfellow, Wadsworth: *Hyperion*, vol.1)

1842 “ Why, Bill, the trouble has given you a bigger bite than I

thought for. What words **did you have** with the preacher? ”
(Simms, William Gilmore: *Beauchampe*, vol.1)

1852 “ Get it? Why, I’ve had it on all day, ” said Eva. “ **Did you**

have it on yesterday? ” (Stowe, Harriet Beecher: *Uncle Tom’s Cabin*)

3.1.4 Don’t/Didn’t PRO have ~ ?

否定疑問文は次の数例を検索できたが, 出現が割合遅く, Stowe 1852年が初出である。主語が3人称や短縮形でない文 (Do you not have ~ ? Do not you have ~ ?¹²⁾) は, 19世紀の文献では見つからない。

12) Do not you ~ ? という, 現代英語では使わない形が近代英語で頻繁に現れているという Söderlind (1951: 234-235) による Dryden の研究や, Austen にもその傾向が強いという末松 (2004: 94-96) の調査がある。

(9)

1852 “ **Don’t you have** some place here on purpose for things to be washed? ”(Stowe, Harriet Beecher: *Uncle Tom’s Cabin*)

1852 “ Something nice! ”echoed the grandfather; “ **don’t we** have something nice every day? ”(Cary, Alice: *Clovernook, or Recollections of our Neighborhood in the West*, vol.2)

1854 “ Why in conscience **don’t you have** hotels enough for your visitors? ”(Cummins, Maria S. : *The Lamplighter*)

1857 “ Why don’t you, then? Why don’t you be bright and hopeful, like me? Why **don’t you have** confidence, China Aster? ”(Melville, Herman: *The Confidence Man*)

1868 “ **Didn’t you have** no brothers nor sisters? ” asked Dick . (Horatio, Alger: *Ragged Dick, or, Street Life in New York*)

3.2 否定文

次に、否定文を見てみよう。1 , 2人称 (do not/don’t have ~) , 3人称 (does not/doesn’t have ~) , 過去時制 (did not/didn’t have ~) に分けて調べた。

3.2.1 do not/don’t have ~

1 , 2人称の否定文の初期の例は次のとおりで、平叙文と命令文が現れている。

(10)

1777 The providing a large quantity of hard Bread, is a thing exceedingly necessary...we shall feel much inconvenience if we **do not have** it . (George Washington: *The Writings of George Washington from the Original Manuscript Sources*, vol.8)

- 1781 If I **do not have** an Opportunity of seeing you soon after my being in Phil. you will hear from me again from that place . (*The Writings of George Washington*, vol.23)
- 1801 Hardly a day passes in which we **do not have** some visitor or other... (Austen: *Jane Austen’s Letters*)
- 1811 **Do not have** your cold muslin unless you really want it . (Austen: *Jane Austen’s Letters*)
- 1815 “ Well, as you please; only **don’t have** a great set out. ” (Austen: *Emma*)
- 1835 “ **Do not have** any care, dear Eliot, about our basket and our store... ” (Sedgwick: *The Linwoods*, vol.2)
- 1836 “ Hangin’s vulgar, so, **don’t you have** nothin’ to say to that. ” (Dickens: *The Pickwick Papers*)
- 1837 “ Have a care, Lucy; **don’t have** any combination against your employer. ” (Sedgwick: *Live and Let Live*)
- 1842 “ But I’m mistaken, if you **don’t have** a real burning when you get to Mrs. Thackeray’s. ” (Simms, William Gilmore: *Beauchampe*, vol.1)
- 1850 The principle of rotation in office is carried out, and there are few of the citizens who in the course of three or four years **do not have** share in the species of sovereignty .(Kirkland: *Forest Life*, vol.1)
- 1850 “ I must have some pork, any way. I sha’n’t keep, this weather, if I **don’t have** some salt meat. ” (Kirkland: *Forest Life*, vol.2)

アメリカ英語では, George Washington の1777年と1781年の2例があり, 19世紀末から, 文語で使われていたことになる。このあと, Sedgwick の1835年, 1837年の例が続く。イギリス英語では, Jane Austen の1801年が初出で, 次には Dickens の1836年がある。Austen には, 1811年, 1815年

の例もあり、両方とも命令文である。統語的に、条件節 (if...) の中で使われている例が4例あることや、命令文が5例あるのが、目をひく。なお、英米ともに縮約形 (don't) の出現が完全形より遅れているのは、Jespersen (1917: 9-11) の否定形の発達パターンを想起させて¹³⁾、興味深い。

3.2.2 does not/doesn't have ~

3人称の否定文は、19世紀後半の次の3例が見つかる。最初の2例はアメリカ英語、最後の例はイギリス英語である。他の構文と比較すると、かなり初出が遅く、恐らく口語におけるこの構文の使用はもっと早くからあったはずであるが、文献に現れるのがたまたま遅かっただけではないかと推測される。

(11)

1871 “Fritz, I see what we can do for that child. She wants something to live for even now, and will be one of the sharp, strong, discontented women if she **does not have** it...” (Alcott, Louisa May: *Little Men*)

1872 [I]t doesn't move them, it **doesn't have** the least effect, they don't care for anything but the literature itself, and they as good as despise influence. (Twain, Mark: *The \$30,000 Bequest and Other Stories*)

1894 “Meanwhile,” said I, “the king'll be hanged if he **doesn't have** some breakfast.” (Hope, Anthony: *The Prisoner of Zenda*)

3.2.3 did not/didn't have ~

この構文の初期の例は(12)のとおりである。アメリカ英語では1783年

13) 古英語では(1) I ne secge, 中英語で(2) I ne seye not, 15世紀には(3) I say not, 16世紀は(4) I do not say, 17世紀には(5) I don't say というような発達をした、と Jespersen は示している。

の *Letters of Delegates to Congress* が初出で、Joseph Smith の1830年、Sedgwick の1837年、Melville の1840年へと続く。イギリス英語では、Dickens の1840年が初出、1850年の例もある。ここでも、上述の Jespersen の説のように、縮約形の現れるのが遅いようである。

(12)

1783 If Thos. would not have her and Porterfield **did not have** her she did not for that reason break her Heart, but took to herself young Sitgraves to comfort her. (*Letters of Delegates to Congress*, 1774-1789, vol.21)

1830 And he came over into the land of Gideon...and here he **did not have** much success...(Smith, Joseph: *The Book of Mormon*. Alma 30: 21)

1837 “ But I **did not have** my Sunday out last Sunday, you know, Mrs. Ferris. ”(Sedgwick: *Live and Let Live*)

1840 “ Where’s this poor feller-creetur’s rights as a citizen, that he **didn’t have** me in his last moments! ”(Dickens: *Barnaby Rudge*)

1846 [O]nly I **did not have** recourse to those voluminous paddings in the rear... (Melville: *Typee*)

1850 “ I **didn’t have** it in my mind a minute ago, to say a word about myself. ”(Dickens: *David Copperfield*)

1852 “ I wish it was broken, or that I **didn’t have** any nose at all! ” (Melville: *Moby Dick*)

3.3 初出年と作家・作品

これまで見た have の do 迂言法の各構文の使用例の初出年、国別、作家と作品や文献を表にまとめると、次のようになる。

表1 have 動詞の do 迂言法の初出年と作家・作品

構文のタイプ	初出年・国	作家・作品
Do you have ~ ?	1891英 1824米	Hardy: <i>Tess of the d'Urbervilles</i> Child: <i>Hobomok</i>
Do/Does PRO have ~ ?	1815英 1862米	Austen: <i>Jane Austen's Letters</i> Stowe: <i>Agnes of Sorrento</i>
Did PRO have ~ ?	1815英 1822米	Austen: <i>Emma</i> Sedgwick: <i>A New-England Tale</i>
Don't/Didn't PRO have ~ ? 英 1852米	検索例無し Stowe: <i>Uncle Tom's Cabin</i>
do not/don't have ~	1801英 1777米	Austen: <i>Jane Austen's Letters</i> <i>George Washington's Writings</i>
does not/doesn't have ~	1894英 1871米	Hope: <i>The Prisoner of Zenda</i> Alcott: <i>Little Men</i>
did not/didn't have ~	1840英 1783米	Dickens: <i>Barnaby Rudge</i> <i>Letters of Delegates to Congress</i>

迂言法の初出例は否定平叙文である。do not have ~ は、アメリカの George Washington の1777年が初出例であり、イギリスでは、Jane Austen の1801年が最初の例である。過去時制 did not have ~ は、アメリカの *Letters of Delegates to Congress* の1783年、イギリスでは Dickens の1840年が初出である。does not have ~ の初出は英米ともに遅く、18世紀後半である。

疑問文が現れるのは否定文より遅れ、Do you have ~ ? は、アメリカの Lydia Maria Child の1824年、Does he have ~ ? は Jane Austen の1815年が初出である。過去時制は、Austen の1815年、アメリカでは Sedgwick の1922年である。否定疑問の Don't you have ~ ? は出現がやや遅く、アメリカの Harriet Beecher Stowe の1852年が最初の例である。

イギリスでは Jane Austen からの初出例が目につく。Does he have ~ ?

は1817年の1例, Did you have ~? は1815年が1例, do not/don't have ~ は1801年の例を含め3例ある。

4 初出作家と作品

前節で、迂言法初出の作家、作品とその初出年が明らかになった。この節では、アメリカの George Washington, Catharine Maria Sedgwick, Lydia Maria Child, イギリスの Jane Austen など、初出例の見られる作家、作品について、単純用法とも比べながら、個別に考察する。

4.1 アメリカ

George Washington (1732-99) の膨大な、書簡を主とする著作集全39巻の中で、have 動詞の do 迂言法は2回現れる。(10) にあげた用例を(13) に再掲する。

(13)

The providing a large quantity of hard Bread, is a thing exceedingly necessary... we shall feel much inconvenience if we **do not have** it .
(1777, *The Writings of George Washington*, vol.8)

If I **do not have** an Opportunity of seeing you soon after my being in Phil. you will hear from me again from that place . (1781, *The Writings of George Washington*, vol.23)

いずれも、平叙文の否定形であり、疑問文は使われていない。疑問文が現れていないのは、この構文の言語的特性というより、恐らく書簡というジャンルに関わるものであろう。つまり、文体的に誰かが何かを所有しているかどうかを尋ねる蓋然性は、小説に比べると、書簡では低いということである。統語的には、2例とも条件節で使われている。迂言法との共起に

何らかの要因が働いているかどうかの判断は、用例数が少ないので、難しい。

Washington には、多数の単純用法の中で、この2例の迂言法がある。同じ巻の中で、これらの迂言法構文に対応する単純用法 *have not ~* の用例は、第8巻に18例と、第23巻に11例ある¹⁴⁾。いわば単発的にこの2例が使われていて、次に、アメリカの文献で *do* 迂言法が登場するのは、1822年、約50年後になる。時代的にはもちろん、作者個人の中でも、いわば孤立した用法で、生産的な構文とは言えそうにない。

Washington の書簡の多くは本人の手書きではなく、Washington 付きの秘書官(副官)が草稿を書いている。例えば、(13)の1777年の草稿は、Alexander Hamilton の手になるとか、1781年の草稿は Jonathan Trumbull, jr .の手になるというような、編集者による脚注の但し書きがある¹⁵⁾。(13)の2つの用例は Washington 自身の文法の一部であったかもしれないし、あるいは秘書官の英語の可能性もある。Washington 自身は使わない英語が、秘書官の書いた草稿を推敲する際に、多数の手紙の中で、気がつかずに埋没したか、気になりはしたが、あえて修正されなかったのかも知れない。いずれにしろ、*do* 迂言法が最初に文献に現れるのは、George Washington の書簡においてである。

その他の初期の作家として、Catharine Maria Sedgwick (1789-1867) と Lydia Maria Child (1802-80) を見てみよう。Sedgwick の用例を、これまであげていないものも含め、(14)に再掲する。疑問文1例と否定文4例がある。

14) いくつか例をあげると、I have not the least cause for such an Imputation; They have not the smallest chance to recruit others... (以上第8巻); I have not a dispositon to be unneighborly; I have not leisure to give a particular account of our proceedings... (以上第23巻).

15) 1777年7月28日に Major General Thomas Mifflin 宛に書かれた手紙には、次の脚注がある。“The draft is in the writing of Alexander Hamilton .”

(14)

“ Yours, ” said Mrs. Wilson; “ that you would not deny, for your name is at full length on it; and when **did you have** it last? ” (1822 , *A New-England Tale*)

“ Ah, Belle, when will that time come that you **do not have** your own way? ” (1835 , *The Linwoods*, vol.1)

“ **Do not have** any care, dear Eliot, about our basket and our store. ”
(1835 , *The Linwoods*, vol.2)

“ But I **did not have** my Sunday out last Sunday... ” (1837 , *Live and Let Live*)

“ Have a care, Lucy; **don’t have** any combination against your employer. ” (1837 , *Live and Let Live*)

Sedgwick の単純用法は、コーパスに収録された小説と短編、約20作品中に、疑問文 (you が主語) が23例、否定文は150数例ある。Did you have ~ ? に対応する単純用法の Had you ~ ? は23例中4例、do not/don’t have ~ と did not have ~ に対応する単純用法 have not ~ と had not ~ は、150数例中、それぞれおよそ40例と80例ある。多数の単純用法を駆使しながら、迂言法の疑問文と否定文を複数例使っており、アメリカ英語における迂言法使用の先駆け的存在と言えるかもしれない。

否定文4例の中に、命令文が2例あり、もしかすると、命令文と迂言法との共起の可能性が考えられる。単純用法 have not ~ は40数例あるが、その中には、命令文はないし、have no ~ の形も、have no fear (doubt, wish, etc.) など多数あるが、命令文は見つからない¹⁶⁾。

16) 因みに、Alcott を調べると、*Little Women* 中に、have not ~ は4例あるが命令文はない。have no ~ 構文は Alcott には多数あり、Have no fear(s) などのイデオム的な命令文が4例ある。don’t have ~ は6例あり、そのうち2例が命令文である。Alcott の使用例を見ると、命令文と迂言法との関連はないとは言えないのではなかろうか。

次に, Child を見てみよう。(6) の例を(15) に再掲する。

(15)

“ **Do you have** any trouble with the latter gentleman, now-a-days? ”
asked Mr. Johnson . (1824 , *Hobomok*, Ch.13)

Child にしても, 単純用法は疑問文が11例, 否定文が8例使われている中で, 迂言法は, (15) の1例のみである。しかも, 同じ人物が, この発話に応じた相手の発言のすぐあとで, 次の(16)の単純用法を使っていて, 迂言法と単純用法の興味ある対比を示している。

(16)

“ And **had he no** prickings of conscience on the occasion? ” inquired
Mr. Johnson.

上の発話の Mr. Johnson という人物は, この歴史小説 *Hobomok* (1824) の中で, イギリスからアメリカにやってきたイギリス人紳士 (Isaac Johnson, Esq.) という役柄である。アメリカとイギリスでは話す英語に違いがあるのは19世紀でも同じである。イギリス英語では, 「習慣」や「繰り返し」を意味するときには *Do you have ~ ?* を, 「一時性」を表す時には *Have you (got) ~ ?* を使うという区別がされると言われてきた¹⁷⁾。(15)

17) Bradley (1904: 71), Barber (1964: 142), Trudgill and Hannah (1982: 67), Quirk et al. (1985: 132), Swan (1995: 241), Algeo (2002: 31-32) など多くの文献にこの語法についての記述がある。Bradley は, *Do you have breakfast at eight?* や *We do not have many visitors* というような習慣的用法の例をあげている。Swan からの次の例は違いがわかりやすい。Sorry, I haven't got any beer; We don't usually have beer in the house. 前者は一時的所有, 後者は習慣的な所有を意味する。この区別は, Bradley がすでに指摘しているように, 20世紀の英語では消失の危機にあるようである (...a convenient distinction in usage which seems to be in danger of being lost)。

の発話は、now-a-days という言葉が示唆するように、繰り返しや習慣性を含意していると取れる。一方、(16) は、on the occasion という表現から、一時性の意味があることは明らかである。(15) と (16) は、この語法の違いを示す格好の用例と言ってもよさそうなほどである。

ところが実は、この小説の舞台は17世紀前半のアメリカで、Mr. Johnson というイギリス人がニューイングランドにやって来たのは1630年、あのメイフラワー号から、まだ10年程しか経っていない頃のことである。その時代に、習慣的所有の用法云々以前に、Do you have ~ ? 構文自体が使われていたのかどうか。もちろん、否としか答えようがない。

では、なぜ、Child は、時代的に使われたはずのない語法を Mr. Johnson に使わせたのか。それは、おそらくこの人物の英国風を強調したかったのではなかったか。そのために、19世紀当時のイギリス英語の特徴を持つ台詞を喋らせたのではないか。Child は19世紀初頭のイギリス語法に通じていたであろう。それが17世紀の初期植民地時代にも使われていたという誤った類推からか、あるいは時代的には使われていないことは承知のうえで、Mr. Johnson にこの用法を使わせたのではなかろうか。いわば、作為的な do 迂言法ということになる。イギリス英語の Do you have ~ ? 構文には独特な意味があるという認識があったことを、Child は、はからずもこの作品中で示していることにならないだろうか。

(15) は、アメリカの小説に現れるが、イギリス人の発話ということで、アメリカ英語の初出例と見なすわけにはいかないであろう。結局、Do you have ~ ? 構文のアメリカ英語での初出は、Kirkland 1834年ということになりそうである。

Washington の do 迂言法は、多数の単純用法の中の、いわば単発的で孤立的と言ってもよい使用例であり、生産的な使用の兆候は感じられない。Child にしても、作為的に作りあげたと思われる迂言法である。Sedgwick になって、多数の単純用法を使いながらのわずかに数例の迂言法であるが、文語での発達を予感させるような使用を見せている。

ところで、アメリカにおける have 動詞の do 迂言法は、文献にはまだあまり現れてはいないが、口語ではすでにながりの定着を見ていたと思われる。「口語で使われている文法は、遅かれ早かれ、文語でも認知される」という Langenfelt の言葉を借りて、Partridge (1969: 32) が示唆するとおりで¹⁸⁾、文語で使われ始めている以上、口語ではかなり定着してきていることが推測される。(11) で、口語と文語の出現時期のギャップに言及したのはそういう理由による。

アメリカ英語において、Sedgwick と同じく、迂言法のいわば体系化を示し始めていると思われる作家は、Caroline Matilda Kirkland (1801-64) である。3 作品中に、疑問文 1 例と否定文が 4 例あり¹⁹⁾、個人における文法化の兆しが伺える。しかし、文献でさらに生産的かつ体系的な使用を見るのは、Herman Melville (1819-91) や Louisa May Alcott (1832-1888) などを経て、Mark Twain (1835-1910) あたりまで待たなければならないようである²⁰⁾。

4.2 イギリス

イギリス英語においては、Jane Austen (1775-1817) が、本動詞 have を do 迂言法で初めて使った先駆的作家であることがわかった²¹⁾。この

18) “Langenfelt’s (1933:127) claim that ‘*syntactical constructions*, used in the spoken language, are sooner or later recognized in the literary one’, can be taken as axiomatic.”

19) Kirkland は、(6) と (10) にあげた疑問文 1 例と否定文 2 例の他に、have to ~ の否定文を 2 例使っている。

20) Melville には do 迂言法の疑問文の使用が 3 例、否定平叙文が 4 例ある。Alcott はそれぞれ 4 例と 12 例である。Mark Twain になると、作品数の多さにもよるが、疑問文 12 例、否定文 34 例と、より生産的な使用を見せている。

21) もしかすると、コーパスに収録されていないが、Austen と同時代か、それ以前に、do 迂言法を使った作家はいたかもしれない。Walpole (1717-97) は Austen より少し前の作家であるが、その do 迂言法が have と共起する例が、Jespersen の文法書に 2 例採録されている (*A Modern English Grammar*, vol.V: 509-510)。但し、その用例の have の意味は、純然たる所有をあらわすものではない (The Captain didn’t have his clothes off for three days and nights; Miss Cardinal was ill and had to come away in the middle, didn’t she?)。

コーパスに収録されている作家で、Austen 以前の Daniel Defoe (1660?-1731) や Jonathan Swift (1667-1745), Henry Fielding (1707-54) にはもちろんないし、Oscar Wilde (1854-1900) Joseph Conrad (1857-1924) Arthur Conan Doyle (1859-1930), Virginia Woolf (1882-1941) など、後の作家達にも使用例がない²²⁾。Thomas Hardy (1840-1928) と D. H. Lawrence (1885-1930) に1例ずつ、Charles Dickens (1812-70), Anthony Trollope (1815-82), Robert Louis Stevenson (1850-1894), Winston Churchill (1874-1965) にそれぞれ数例ずつ見つかるのみである²³⁾。20世紀の Agatha Christie (1890-1976) のコーパス中の一作品にさえ、1例の過去時制の否定平叙文しか現れていない²⁴⁾。前の時代の作家はもちろん、後の時代の多くの作家たちにもあまり使われていないことからすると、ある意味 Jane Austen に特異な言語事象であると言える。

単純用法の構文を多用しているなかで、Austen はほんの数例の do 迂言法しか使っていないが、そこに何らかの意図が働いているのかどうか。あるいは統語的もしくは意味的な制約の中で使われていないのかどうか。以下、do 迂言法の現れた Austen の2作品の中の用例について、単純用法と比較しながら検討してみよう。

まず、1801年に、do not have ~ 構文の初出例の現れた *Jane Austen's*

22) 但し、作家の全作品が収録されているわけではないし、収録されていても、学外者使用制限つきの作品もある。Chesterton (1874-1936) のように、コーパスに収録された作品では検索されないが、上記の Jespersen に用例が採録されているような作家もいる。

23) Thackeray (1811-1863) や Galsworthy (1867-1933) などはこのコーパスには収録されていないが、前述の Jespersen の文法書には、数例ずつ用例がある (vol. V: 509-511)。

24) *The Mysterious Affair at Styles* (1920) に、Inglethorp didn't have a candle, only a reading lamp という唯一の用例がある。疑問文は単純用法のみで、例えば、Have you ~? 構文であれば、この作品中に4例使われていて、20世紀初頭、Agatha Christie の時代でも、do 迂言法はそれほど人口に膾炙していなかったことがわかる。

Letters To Her Sister Cassandra and Others を見てみよう。(7)(8)に挙げた例を(17)に再掲する。否定文が2例、疑問文が1例ある。

(17)

Hardly a day passes in which we **do not have** some visitor or other .

(To Cassandra Austen, Wednesday 14 January , 1801)

The Tea is this moment setting out. **Do not have** your cold muslin unless you really want it... (To Cassandra Austen, Thursday 25 April , 1811)

Sweet amiable Frank! why **does he have** a cold too? Like Capt Mirvan to Mr. Duval , “ I wish it well over with him. ” (To Cassandra Austen, Sunday 26 November , 1815)

この作品中の単純用法の疑問文は、Have you ~ ? が3例、Has she ~ ? が1例ある。否定文は、have not ~ が15例、has not ~ が8例、had not ~ が11例あるから、やはり、do 迂言法は、Austen にとっても稀少な語法であると言わざるを得ない。

1801年の例は、Childのところで述べた、イギリス英語に特有な、習慣的あるいは反復的な意味の用法ではなかろうか。「訪問客がない日は一日たりともない(=訪問客はいつもある)」と解せる文であり、上述したBradley(1904: 71)が習慣的用法としてあげた例(We do not have many visitors)に酷似してもいる²⁵⁾。

1811年の例は否定の命令文である。(18)で見る*Emma*でも命令文が使

25) 新井(2008: 38)によれば、「当時は、他人の家や庭を観光目的で訪問することがはやり始めていた」ということであるから、もしそういう意味での‘visitor’であれば、「習慣的な行為」という意味が付随することがよりよく理解できる。Austinの場合は、Austin家の転居前の、隣人、知人によるお別れの訪問のようである。

われているが、Sedgwick のところで述べたように、統語的に命令文との共起の可能性はないかどうか。単純用法の have not ~ 構文は *Letters* に13例、*Emma* に17例あるが、命令文は見つからない。Austen の全作品中でも、have not ~ 構文は90例ほどあるが、命令文はない。Have no ~ 構文にしても、Let’s have no secrets among friends (*Sense and Sensibility*, Ch.23) の1例が見つかるだけである。Austen も、命令文については迂言法を選んだという可能性は考えられないであろうか。

1815年の例は、この文の2行前に、“We are glad the Mama’s cold has not been worse” とあるから、‘a cold’ から ‘to catch’ を連想し、所有以外の意味が含意されるということ²⁶⁾、迂言法が選択されたのではない。あるいはまた、疑問詞との共起の可能性が考えられるかもしれない。

単純用法の疑問文は、Austen の全作品の中に、30例ほどあるが、疑問詞を伴うのは2例しかない²⁷⁾、迂言法を使った理由として、疑問詞と共起しやすいということが考えられなくもない²⁸⁾。ただ、これはわずかに数例の用例であるから憶測の域をでないが²⁹⁾、(6) から (9) の、構文的には無作為に選んだ疑問文23例のうち、11例が wh- 疑問詞を伴っているのを見ると、迂言法との共起はありえないことではないかもしれない。

26) イギリス英語でも、本動詞 have が所有以外の意味 (‘to partake of’ = eat, drink, etc.) で使われる時は、do 迂言法が使われるという指摘がある (Jespersen, vol.IV: 51)。Quirk et al. (1985: 132) も、‘receive’, ‘take’, ‘experience’ のような動的な意味 (dynamic sense) の場合や、出来事を表す目的語 (eventive object)、例えば have breakfast (= ‘eat breakfast’) のような慣用句の場合は do を使うと言う。

27) Why have you no fire to-day? (*Mansfield Park*, Ch.32) と What chap have you there? (*Northanger Abbey*, Ch.10) の2例である。

28) Söderlind (1951: 220-221, 229-235) に、疑問詞があるかないかを基準にした do 迂言法の出現の調査があり、疑問詞の有無による考慮をすることは不適切ではないであろう。

29) Shakespeare と Ben Jonson では、疑問詞に導かれる場合は do なし疑問文が多いという、初期近代英語における一般動詞の調査もあり (小野・伊藤, 1993: 163)、筆者の推測とは逆の結論を示している。

BNCで³⁰⁾、‘do you have’を検索すると、1033例が見つかる。不適切な例も若干あるが、そのうち、wh-疑問詞と共起するのは、約110例である。つまり、現代イギリス英語では、Do you have ~? 疑問文のうち、wh-疑問詞を伴うのは、約10%ということになる。23例中の11例という数字は相対的にかなり高い数値と言ってよいであろう。

この作品は、小説ではなく、Austenの私信であるから、do 迂言法の使用例はまさに Austen 自身の英語の発露と言える。作者本人の手紙文でも使われ、彼女の小説でも使われている do 迂言法は、社会における口語使用を反映していると考えてもよいのではなかろうか。

Emma (1815)における do 迂言法は(18)の2例である。単純用法は、疑問文の Have you ~? が4例、Has he ~? が2例、否定文は、have not ~ が17例、has not ~ が14例、had not ~ が16例あり、多数の単純用法が使われる中で、迂言法はこの2例のみである。

(18)

“ **Did you ever have** your likeness taken, Harriet?” said she: “ Did you ever sit for your posture?” (Ch.6)

“ Well - as you please; only **don't have** a great set out...” (Ch.42)

最初の文における have は純然たる所有の意味をあらわすわけではないが、単純用法の選択も可能であったはずであるのに、迂言法を使っている。Jespersen (vol.V: 510) は、「have が主述関係 (nexus) の目的語を従える時は、do が使われる (do is used when have is followed by a nexus object) 」と言って、同じ文を用例としてあげている。

30) British National Corpus の略で、現代イギリス英語の一億語のコーパス。書き言葉テキストが90%、話し言葉テキストが10%で構成されている。但し、使った BNC は、小学館コーパスネットワークが提供する BNC オンラインで、BNC とは実質的な違いはないと言ってよい。

2番目の文では、動詞 have には、純然たる所有以外の意味も感じられるので（例えば、‘to prepare’の意）、迂言法が使われたのではなからうか。あるいは、先程述べた、命令文との関連もあるかもしれない。

この2文の発話者は、最初の文は主人公エマ、2番目はエルトン牧師夫人である。エマは別の箇所で、次の(19)のような、単純用法の例も使っている。

(19)

“We shall never agree about him,” cried Emma; “but that is nothing extraordinary. **I have not** the least idea of his being a weak young man...” (Ch. 18)

Emma turned round to look at her in consternation, and hastily said:

“**Have you** any idea of Mr. Knightley’s returning your affection?”
(Ch. 47)

エマは単純用法と迂言法の2種類の文法を持ち、両者の使い分けをしていることになる。但し、(19)の用例については、Biber et al. (1999: 162) が言うように、現代英語へと継承されていく慣用的な語法と言えなくもないので³¹⁾、do 迂言法が選ばれる余地はなかったのかも知れない。

Austen がどういう意図を持って、do 迂言法を使ったかは、個別の用法についての推測をする以外、明らかではない。Austen 以前の、Defoe や Swift, Fielding のような作家には迂言法の使用例がないし、Austen より一世代後の、Dickens や Trollope のような大作家の膨大な作品中にも、

31) Biber et al. は、現代イギリス英語のフィクションにおける単純用法の使用は保守的な英語を反映していて、特に次のような連語で起こるようになっていっている。haven’t a clue, haven’t (the) time, haven’t the heart/nerve/right/sense to, haven’t the the faintest/foggiest/slightest idea.

わずかな用例の迂言法しか見つからない³²⁾。Austen が自らの書簡の中で使っているから、Austen の文法の一部になっていたと考えるのは、用例数が少ないために即断すぎるかもしれない。多くの単純用法の使用例の中で、do 迂言法を使ったのは、もしかすると、Austen に限らず、作者の単なる一時的衝動というふうに解せないこともなかりう。1801年の最初の使用例当時、Austen はまだ25歳、すでに口語では少なからず使われていたと思われる斬新的な英語を、文語でも試してみたいというような淡い希求を持ってもおかしくない年頃であったかもしれない。

Page (1972: 188) は、Austen について、「伝統派と革新派の二重の性質を認識しない限り、Austen を説明することはできない (no account of her is complete without a recognition of her dual quality as traditionalist and innovator)」と言っているし、また、「文体に関しては、彼女の語彙は過去を向いていて保守的であるが、統語法は明らかに実験的かつ冒険的である (On the stylistic level, her vocabulary tends to be backward-looking and conservative, whilst her syntax is more obviously experimental and adventurous)」という評言をしている。

Austen の作品において、文法上の革新性が意図されていることについては、的はずれな議論ではないと思われる。所有の意味を持つ本動詞 have と他の助動詞とは共起し (Why **must you have** hunters? *S & S*, Ch. 17), また一般動詞が do 迂言法で使われていたわけであるから (How **do you like** my gown? *Emma*, Ch. 38), have と do 迂言法を一緒に使っても何の差し支えもないじゃない、くらいの気持ちが Austen にはあったかもしれない。ただ、伝統的文法の抑制は働いており³³⁾、生産的な使用

32) Dickens には、迂言法の否定文のみ 8 例、Trollope には疑問文 1 例、否定文 6 例がある。Dickens の主要作品数は小説だけで16作品、Trollope は35作品であることを考えると、一世代前の Austen が 8 作品で使った迂言法の使用例は相対的に随分多いと言える。

33) 当時は、規範文法全盛の時代であり、広く人気を博した文法書に、Joseph Priestley の *The Rudiments of English Grammar* (1761) や Robert Lowth の *A Short*

にまでは至らなかったということではなからうか。

ところで、言語使用における保守性や革新性というものは、いつの時代でも観察されることである。言語変化は子供や若者の言葉から起こることとはつとに指摘されており³⁴⁾、若者や子供たちの言語使用において、斬新的な用法が生み出されることは、我々の周りでも日常的に観察されることである。

英語の歴史においても、例えば、中世の大詩人 Chaucer はその作品の中で、次のような do 迂言法を 1 回使っていて、しかもそれは子供の発話であるという、Partridge の指摘がある (1969: 31)。

(20)

Fader, why do ye wepe?(*Monk's Tale* , 2432)

Chaucer は新しい言葉使いを子供の言葉に観ていたということになる。さらに、Partridge は、「保守的な作家として、Chaucer 自身は避けた用法が、庶民の会話では自由に使われていた (it was a freedom of common speech

Introduction to English Grammar (1762) などがある。1795年には、Lindley Murray の超ベストセラー、*English Grammar* が出版されている。Tomalin (1998: 35)によれば、Austen が1783年の春から数ヶ月過ごした Oxford の寄宿学校では、「学習のほうは、辞書と文法書と地理の本の丸暗記で…」とあるから、Priestley や Lowth の文法書が使われていたかも知れない。1785年から1786年にかけて寄宿した、Redding の Abbey School でも同じような状況であろう。もしそうであれば、それなりの規範文法観というものは持ち合わせていたかも知れない。Tieken-Boon (2009: 78) は、「Jane Austen は恐らく、Lowth の文法を学んだであろう... もし文法を学んでいたとしたら、学校でなく、家庭において母親からであったろう」と言っている。

34) 学問的考証の必要はないかもしれないが、例えば、*OED* 初版の編集主幹でもある Henry Bradley はその名著 *The Making of English* (1904: 19) の中で、「恐らくたいていのイギリスの子どもたちは ‘mouses’ とか ‘speaked’ という言い方をしたことがあるであろう (Probably most English children have sometimes said ‘mouses’ or ‘speaked’)」と言っていて、言語変化は子どもの言葉から起こることを示唆している。

that he himself avoided, as a conservative writer)」とも言っている。

Austen と同時代や後の作家達は、日常的な会話の中では使われていた用法を、自らの作品の中で使っていないのは、言語的保守性のゆえであろう。Austen は、自身の書簡の中で、また小説の中でも、わずかではあるが do 迂言法を使っている。それは、Austen がまだ20代半ば過ぎの若い作家で、彼女の若さと進取の気性とでもいうものが、彼女をして文法面における革新性へというような意欲的試みへと目覚めさせたと考えられないであろうか³⁵⁾。

5 結 び

本稿では、動詞 have (「持つ」) が助動詞 do を伴う、いわゆる do 迂言法 (Do you have ~ ? 構文, do not have ~ 構文など) がいつ頃から文献に現れ始めたか、またなぜ多数の単純用法 (Have you ~ ? have not ~ など) に混じって使われたかを考察した。

利用したのはバージニア大学の Modern English Collection で、このコーパスを使ってデータを集め、得られた結果から、これらの構文が文献に初めて登場するのは、18世紀末のアメリカであり、19世紀初頭にはイギリスでも文献に現れることがわかった。

アメリカ英語では、George Washington の著作集における1777年の否

35) Tomalin (1998) の Austen 伝にある彼女の性格描写を拾うと、次のようなものがある。「気丈で、感傷とは無縁の少女 (Jane Austen was a tough and unsentimental child)」(p.30), 「ジェインは気まぐれで気取った (Jane was 'whimsical and affected')」(p.59), 「ジェインは何をするか分からない、とらえどころのない娘 (Jane was unpredictable, elusive)」(p.141), 「魔女にもなれる精神力の持ち主 (her own spirit strong enough for a sorceress)」(p.265)。こういう表現だけで Austen の性格形成を試みることは慎まなければならないが、気丈で、破天荒な一面を持ち合わせた女性というイメージが浮かばなくもない。もしかすると、そういう気質が Austen をして文法的には破格表現への道へと導いたのであろうか。

定文 do not have ~ 構文 (*We shall feel much inconvenience if we do not have it*) が初出であり、イギリス英語では Jane Austen の1801年の私信で使われた do not have ~ 構文 (*Hardly a day passes in which we do not have some visitor or other*) が最初の例である。Visser の見解とは異なり、1777年、アメリカの Washington の著作集が初出文献であることがわかった。

Do you have ~ ? 構文については、アメリカの Kirkland の1839年の例 (*Do you have any butter now ?*) がある。(アメリカの Child の1824年の例も検索されたが、作品中のイギリス人の登場人物に使われた、作為的なイギリス英語と解さざるをえない。) イギリスでは、Thomas Hardy の1891年と遅い。Don't you have ~ ? 構文も出現が遅く、1852年の Stowe が初出である。

過去時制の否定文 did not/didn't have ~ は、アメリカでは1783年の *Letters of Delegates to Congress*、イギリスでは Dickens 1840年が初出である。does not/doesn't have ~ 構文は、アメリカの Mark Twain の1872年、イギリスの Hope の1894年と初出が遅い。口語使用はあっても、文献に現れるのが遅かっただけではないかと推察される。

Washington に限らず、初期の作品中の迂言法は多数の単純用法の中のいわば孤立した用法である場合が多い。do 迂言法の使用が生産的で、体系化してくる兆しは、アメリカでは、Sedgwick や Kirkland あたりで、さらに本格化するのには、19世紀も後半、Herman Melville や Louisa May Alcott などを経て、Mark Twain の頃になってからである。

イギリスでは、Jane Austen が do 迂言法使用の先駆者である。1801年の例の他、1815年の Does he have ~ ? 構文 (*Why does he have a cold too?*) と同じく1815年の Did you have ~ ? (*Did you ever have your likeness taken?*) も初出である。Austen が迂言法を使った理由として、動詞 have が「所有」以外の意味を表すときや、イギリス英語特有の、「習慣的所有」を意味する場合が考えられる。統語的に見ると、Austen に限らず、条件節 (if...) や否定命令文、wh- 疑問詞のある疑問文では、迂言法が使われ

ることが多いのが観察される。

Jane Austen は、多数の単純用法の中で、少数ではあるが迂言法を使っている。それは、Page (1972) が彼女を評して、文法面における「革新主義者 (an innovator)」と言うように、Austen がまだ若く、意欲的な作家で、文法的に新しい語法を試みようとしたことに理由が求められるのではなかろうか。

今後の課題として、コーパスに収録されていない、18世紀後半から19世紀にかけての文献を精読し、do 迂言法の使用例がないかどうかを調査すれば、研究の精度を高めることができるであろう。また、do 迂言法と単純用法の両方を使っている19世紀後半から20世紀初頭にかけての作家作品が少なくないから、現代英語における用法と比較し、両者の使い分けに何らかの意図や意味があるのかどうかの調査も興味深いであろう。

参考文献

- Barber, Charles . 1964 . *Linguistic Change in Present-day English* . Edinburgh and London: Oliver & Boyd.
- Barber, Charles . 1993 . *The English Language: A Historical Introduction* . Cambridge: Cambridge University Press .
- Barber, Charles . 1997 . *Early Modern English*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan .1999 *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow, Essex: Longman .
- Bradley, Henry . 1904 . *The Making of English*. London: Macmillan .
- Ellegård, Alvar . 1953 . *The Auxiliary Do: the Establishment and Regulation of its Use in English*. Stockholm: Almqvist & Wiksell .
- Görlach, Manfred . 2001 . *Eighteenth-Century English*. Heidelberg: Universitätsverlag C. Winter .
- Jespersen, Otto . 1909-1949 . *A Modern English Grammar on Historical Principles*.

- 7 vols. London: George Allen and Unwin .
- Jespersen, Otto . 1917 . *Negation in English and Other Languages* . Copenhagen: A. F. Hø ST .
- Langenfelt, Gösta . 1933 . *Select Studies in Colloquial English of the Late Middle Ages*. Lund: Gleerupska Univ. Bokhandeln .
- Nevalainen, Terttu . 2006 . *An Introduction to Early Modern English* . Edinburgh: Edinburgh University Press .
- Page, Norman . 1972 . *The Language of Jane Austen*. Oxford: Basil Blackwell .
- Partridge, A. C . 1969 . *Tudor to Augustan English*. London: André Deutsch .
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik . 1985 . *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman .
- Söderlind, Johannes . 1951 . *Verb Syntax in John Dryden's Prose*. vol.1 . Uppsala: Lundequistska Bokhandeln .
- Swan, Michael . 1995 . *Practical English Usage*. Second Edition. Oxford: Oxford University Press .
- Tieken-Boon van Ostade, Ingrid .1987 .*The Auxiliary Do in Eighteenth-century English: A Sociohistorical-linguistic Approach*. Dordrecht, Holland: Foris Publications .
- Tieken-Boon van Ostade, Ingrid . 2009 . *An Introduction to Late Modern English*. Edinburgh: Edinburgh University Press .
- Tomalin, Claire. 1998 . *Jane Austen: A Life*. London: Penguin Books .
- (トマリソ、クレアー (矢倉尚子訳) . 1999 . 『ジェイン・オースティン伝』白水社 .)
- Trudgill, Peter and Jean Hannah . 1982¹ , 2002⁴ . *International English: A Guide to the Varieties of Standard English* . London: Edward Arnold .
- Visser, F. Th . 1969 . *An Historical Syntax of the English Language*. vol. III-1 . Leiden: E. J. Brill .
- OED = *The Oxford English Dictionary* . 1933 . Murray, James A. H., Henry Bradley, William A. Craigie, and Charles T. Onions, eds. Oxford: Clarendon Press .
- 新井潤美 . 2008 . 『自負と偏見のイギリス文化 - J. オースティンの世界』岩波新書 .
- 荒木一雄・宇賀治正朋 . 1984 . 『英語史IIIA』大修館書店 .

小野 捷・伊藤弘之．1993．『近代英語の発達』英潮社．

末松信子．2004．『ジェイン・オースティンの英語 - その歴史・社会言語学的研究
- 』開文社

竹田津 進．2011．「現代イギリス英語の Have you (got)? 構文と Do you have ?
構文」*The Kyushu Review* 第13号 , pp.11-28 .

角田太作．2009．『世界の言語と日本語 改訂版 - 言語類型論からみた日本語』くろ
しお出版．

Summary

Some thoughts on the first-appearance dates of ‘ Do you have ~ ? ’ constructions in Late Modern English

This article is an attempt to discover when and why the periphrastic use of the auxiliary *do* with the main verb *have* whose meaning is ‘ possession ’ began to be used in the history of English. Using a computer corpus (Modern English Collection created at the Electronic Text Center of the University of Virginia), I have searched for such phrases as ‘ Do you have ~ ? ’ , ‘ Did they have ~ ? ’ , ‘ do not have ~ ’ , ‘ didn’t have ~ ’ and so forth, and collected data .

The results show that the very first citation of the *do* periphrasis with the verb *have* occurs in a negative sentence in one of the writings of George Washington in 1777 (*We shall feel much inconvenience if we do not have it*) and that the first British citation is found in one of Jane Austen’s letters written in 1801 (*Hardly a day passes in which we do not have some visitor or other*). The first citations of the questions are found in Austen (1815 *Why does he have a cold too?*) and in Kirkland in America (1834 *Do you have any butter now?*).

The first citations of the other constructions are as follows: *Did you have ~ ?* Austen 1815; *Don’t you have ~ ?* Stowe 1852; *does not have ~* Alcott 1871; *didn’t have ~* *Letter of Delegates to Congress* 1783 . The comparative late occurrences of Stowe’s or Alcott’s citations may be attributed to the fact that the usage must have been popular in colloquial speech but it accidentally appeared much later in literary works since gaps in the occurrence in spoken English and written English are regu-

larly observed .

The *do* periphrases occurring in such works as the writings of George Washington are only sporadic and hardly productive at all. The first signs of productiveness are seen in writers such as Sedgwick or Kirkland. We have to wait till the late 19th century, however, to witness the real productiveness or systematic use of the *do* periphrasis, in the works of Herman Melville or Louisa May Alcott first, and then Mark Twain slightly later .

The first English writer who used the *do* periphrasis was Jane Austen. There are some conceivable reasons that she made use of this usage. First, the *do* periphrasis is used when the verb *have* implies the meaning other than ‘ possession ’ . Secondly, British English used the periphrasis to mean ‘ habitualness ’ or ‘ repetition ’ , while the simple form (*Have you ~ ? , have not ~*) signified the single-time event. Syntactically, *if* conditionals and imperatives are often seen to be used with the periphrasis, as are the interrogatives with a *wh-* word. This seems to be true not only of Austen but also of other writers as well .

Another reason for Austen’s use of the periphrasis with *have* may be found in her spirit of writing. She is said to be an innovative writer in terms of syntax as Page (1972) refers to her as a syntactical “ innovator ” , as opposed to her conservatism in the use of vocabulary. In her youth as a novelist, Jane Austen may have had a liking for syntactically novel constructions, which must have been prevalent in popular speech, yet to be utilized in literary works. Jane Austen was bold enough to do what no man had done before .

謝辞・Acknowledgment

本稿の査読を九州大学名誉教授田島松二先生に賜りました。田島先生には細部にまでわたり、内容や書式、文体に関して、貴重なコメントや助言をいただきました。ここに記して謝意を表します。

I would also like to extend my gratitude to the Electronic Text Center of the University of Virginia who kindly and generously allow corpus users the world over to utilize this magnificent creation. Without it, this research would not even have been dreamed of .